

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 163 November 2021

研究の最前線

◆ 2021年度冬期国際ワークショップ ◆ 《権威主義的統治の制度と戦略》開催予告

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のため、対面での国際会議を日本で開催することは依然としてほぼ不可能な状況です。オンラインで開催するにも、欧米からのゲストが多い場合、1日にいくつものセッションを開くことは時差の関係で困難です。そこで今回は規模を縮小し、2021年12月8日(水)～10日(金)の3日間に分けて、3セッションから成るワークショップを開くことにしました。

このワークショップは、科研費基盤研究(A)「権威主義とポピュリズムの台頭に関する比較研究」(代表: 宇山智彦)が企画するもので、特に科研メンバーの東島雅昌氏(東北大学)が立案の中心となっています。近年の世界的な民主主義の後退によって、権威主義体制は政治学の中で注目されるテーマになりましたが、非民主的な体制がどのように生き延びるのかという古典的な問題設定を超えて、日常的な統治構造を比較の観点から明らかにする研究はまだ多くありません。権威主義が統治システムとしてどのように機能しているのか、統治は効率的なのか非効率的なのか、どのような制度と戦略が用いられているのかなど、解明・議論すべき論点は多くあります。このワークショップでは、旧ソ連地域を中心としながら東南アジア、東アジア、中東にも目を配ってこれらの問題を検討します。外国人報告者・討論者の中には、比較政治学で強みを持つミシガン大学の関係者が数人含まれており、今後の研究ネットワークの発展が期待されます。

参加は、センターのウェブサイトから申し込むことができます。多くの皆様の参加をお待ちしています。
[宇山]

Slavic-Eurasian Research Center 2021 Winter International Workshop

Authoritarian Governance: Institutions and Strategies

December 8–10, 2021
Language: English / 併用言語: 英語・日本語

Program

December 8 (Wed.)
Opening Remarks 9:00–10:00 (JST/UTC)
Tomohiko Uyama (SRC)
Masashi Higashijima (Tohoku University)

Session 1 10:00–11:00 (JST/UTC)
Informal Politics and Governability in Authoritarian Regimes: Russia
Papers: David Sakabayev (George Washington University), Masatoshi Torikai (Japan Society for the Promotion of Science / Kyoto University), Eugenia Comanescu (University of Chicago)
Discussion: Natalia Forrat (University of Michigan)
Chair: Manabu Sengoku (SRC)

December 9 (Thu.)
Session 2 14:30–18:30 (JST/UTC)
Between State and Society in the Developing World: The Middle East and Caucasus
Papers: Estem Lant (University of Guelph), Yu Tachibana (Hokkaido University)
Discussion: Scott Radnitz (University of Washington)
Chair: Masashi Higashijima (Tohoku University)

December 10 (Fri.)
Session 3 10:00–11:00 (JST/UTC)
Program: Strategy and Autocrats' Reactions to Crises: Southeast and East Asia
Papers: Dan Slater (University of Michigan), Ayame Suzuki (Doshisha University)
Discussion: Lee Morgenbesser (Griffith University)
Chair: Yuka Kitagawa (Keio University)

Venue: Online with Zoom
(Hosted by the Slavic-Eurasian Research Center (SRC), Hokkaido University, Sapporo, Japan)

Details & Online Registration: Please register by December 6, 2021. <https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/2021winter/>

Organized by: Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
2-1-1, Sapporo, Hokkaido, Japan
E-mail: searc@slav.hokudai.ac.jp | <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>

Co-sponsored by: JSPS KAKENHI Grant Number 18040419
(Comparative Study of the Rise of Authoritarianism and Populism)

Authoritarian Governance: Institutions and Strategies

開催形態：オンライン 使用言語：英語

December 8 (Wed.)

9:50–10:00 (GMT+9) **Opening Remarks**

Tomohiko Uyama (SRC)
Masaaki Higashijima (Tohoku University)

10:00–12:00 (GMT+9) **Session 1. Informal Politics and Governability in Authoritarian Regimes: Russia**

David Szakonyi (George Washington University)

“Hidden Earnings in an Authoritarian Parliament: Evidence from Russia”

Masatomo Torikai (Japan Society for the Promotion of Science / Keio University),
Evgenia Olimpieva (University of Chicago)

“Who Goes to Jail and Who Stays in Office? Elite Competition and Criminal Investigation of Mayors in Russia”

Discussant: **Natalia Forrat** (University of Michigan)

Chair: **Manabu Sengoku** (SRC)

December 9 (Thu.)

16:30–18:30 (GMT+9) **Session 2. Between State and Society in the Developing World: The Middle East and Caucasus**

Ellen Lust (University of Gothenburg)

“Everyday Choices: The Role of Competing Authorities and Social Institutions in Politics and Development”

Yu Tachibana (Hokkaido University)

“The Daily Forms of Authoritarian Regime? Municipality System in Post-Soviet Azerbaijan”

Discussant: **Scott Radnitz** (University of Washington)

Chair: **Masaaki Higashijima** (Tohoku University)

December 10 (Fri.)

10:00–12:00 (GMT+9) **Session 3. Regime Strengths and Autocrats’ Reactions to Crises: Southeast and East Asia**

Dan Slater (University of Michigan)

“Democracy through Strength: Asia’s Development and Democratization”

Ayame Suzuki (Doshisha University)

“Stern but Not Strong: Assessing State Capacity through COVID-19 Responses of Selected Southeast Asian States”

Discussant: **Lee Morgenbesser** (Griffith University)

Chair: **Yuko Kasuya** (Keio University)

◆ 2021年度夏期国際シンポジウム ◆
 ≪不確実性の時代のスラブ・ユーラシア研究：対話と再検討≫開催される

センターは7月5日(月)から7日(水)にかけて、今年度の夏の国際シンポジウムSlavic and Eurasian Studies in Times of Uncertainty: Dialogue and Reappraisalを開催しました。新型コロナウイルスの影響が長引くなか、Zoomという新しいコミュニケーション・ツールを用いて、コロナ禍のため来日できていない2020年度・2021年度外国人研究員によるオンラインでの報告をプログラムの中心に据えました。センターの研究員やセンターと関わりの深い研究者との交流機会を確保することで、センターの活動の基幹を成す国際共同研究を困難な状況下でも着実に進めていることを示すことができました。

岩下明裕・宇山智彦・安達大輔の三名による共同組織に取り組んだことも新たな特徴です。それぞれが研究代表者を務める科研費プロジェクト(基盤研究(B)「領土」をめぐる実態と社会構築：北東アジア地域の比較を中心に)、基盤研究(A)「権威主義とポピュリズムの台頭に関する比較研究」、基盤研究(B)「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」に加え、人間文化研究機構(NIHU)「北東アジア地域研究」プロジェクト、Association for Borderlands Studies日本チャプターがシンポジウムを共催しました。第2セッションは、2020年7月に部局間協定を結んだユニバーシティ・カレッジ・ロンドン・スラブ東欧研究学院(UCL SSEES)の協力を得て行われました。

初日7月5日(月)は宇山が組織した第1セッション「中央ユーラシア史における外交と貿易」で始まり、ロシア帝国とヒヴァ・ハン国および清朝領新疆の貿易に関する権益や規制・促進と、露清の内外政の関係が論じられました。続く第2セッション(担当：安達)では、「ロシア文化におけるヴァーチャル：革命前後を比較する」というテーマのもと、19世紀前半の文学と写真の関係、ロシア革命以前の知られざるメロドラマ映画、ソ連のもっとも著名な映画監督のひとりエイゼンシュテインの観客論における身体とメディアの役割について、刺激的な報告と議論が行われました。

二日目は岩下が組織したセッションが並びました。第3セッション「ロシアにとっての日本と韓国、韓国と日本にとってのロシア」は、日韓とロシアの相互認識について、ロシア、ニュージーランドの研究者が報告し、第4セッション「ロシアにとっての主権とスペース：国際法学と政治地理学の対話」では、ロシアの国際法と政治地理に関わる議論をエストニアと英国の研究者が行いました。

三日目には宇山が組織した第5セッション「ソ連・ポストソ連空間における民族問題の再考」が開催され、シンポジウムの掉尾を飾りました。ペレストロイカ期の民族政策の再評価と、カザフスタンの民族間関係のあり方の変化を論じ、民族問題の流れを通時的に把握することができました。

各セッションの参加者数は30～50名ほどで、計17か国から3日間の延べ人数で200人以上が参加する盛会となりました。[安達]



◆ 2021年度公開講座の開講 ◆
 ≪メロドラマするロシア：アジアとの比較から考える大衆文化の想像力≫

今年度の公開講座は、「メロドラマするロシア：アジアとの比較から考える大衆文化の想像力」をテーマに、10月4日（月）から22日（月）まで6回にわたって開催されました。勧善懲悪劇から恋愛映画まで、これまであまり知られてこなかったロシアのメロドラマの多様で豊かな世界に親しむとともに、アジアとの比較を通じて、大衆社会を生きる人々の想像力の歴史について学ぶことが開講の目的でした。従来のメロドラマ研究が欧米中心に偏ってきたのに対し、この講座ではロシアのメロドラマに光を当て、やはり周縁的な存在とされてきた日本・中国・インドと比較して考える貴重な機会となりました。2019年度から実施されている科学研究費基盤研究（B）「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマの想像力の総合的研究」による最新の研究成果に基づいて、メロドラマが同時代のアクチュアルな問題と結びついて実に多様な形をとりながら、各地域の文化や社会の特徴を反映していることが論じられました。

初期メロドラマの二類型

ジャン＝マリ・トマゾー『メロドラマ：フランスの大衆文化』（仏語原著1984年；日本語訳1991年）
Томашевский, Frank Rahillらによる分類

	古典メロドラマ	ロマン主義メロドラマ
時期	1815年あたりまでの帝政期フランス	1815年以降のフランス
影響関係	ドイツ市民劇・イギリスのゴシック小説・フランスの大衆演劇（パントマイム、定期市、小劇場）を源泉とする	当時のフランス・ロマン主義と結びく
特徴	勧善懲悪の道徳的傾向	感情の過剰さを特徴として、一部は恐怖・暴力・強姦さを挿入した
代表的劇作家	ピクセレクール（1773-1844）	デュカンジュ（1783-1833）

講義資料

長引く新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、様々な新しい試みにも取り組みました。当初予定されていた2020年度の開講がかなわず今年度に延期となった後、状況を見ながら、開催時期を例年の5月から10月に移しました。開催方法についてもセンター内で慎重に検討を加えた結果、対面での開催を見合わせ、Zoomウェビナーを用いることで、センターでは初となるオンラインでの公開講座を無料で実施するに至りました。

このように手探りの部分が大きかったのですが、若手・中堅世代の一流の講師陣による双方向的でわかりやすい講義はとても好評で、チャットやマイクを使った質疑応答も盛り上がりました。受講者数は最大で90名を超え、延べ385人の方にご参加いただきました。全講義終了後に行われたアンケートからは、日本全国から受講者が集まるとともに札幌市民も多数参加したことが伺えます。札幌市民と他地域の住民の交流の場を札幌発で提供する、新しい市民講座のモデルを示すことができたように思われます。



講義中の安達准教授

なお、開講の準備段階で大変お世話になり、「ロシアのメロドラマの日本における受容」というテーマでご講義いただく予定だった河野真理江先生が、開講直前に急逝なされました。この場を借りて、お礼を申し上げるとともに、改めてご冥福をお祈りします。[安達]

第1回	10月4日 (月)	19世紀ロシアのメロドラマ	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 安達 大輔
第2回	10月8日 (金)	「救国の妓女」幻想：中国におけるメロドラマの系譜	北海道大学大学院 文学研究院 准教授 田村 容子

第3回	10月11日 (月)	バレエ『白鳥の湖』悲劇からメロドラマへ	上智大学外国語学部 / 日本学術 振興会 特別研究員 斎藤 慶子
第4回	10月15日 (金)	ソ連製メロドラマ映画と住宅	岡山大学大学院 社会文化学研究 科 准教授 本田 晃子
第5回	10月18日 (月)	いつか王子様が？：ドラマ「Made in Heaven」 に見る現代インド結婚事情	追手門学院大学 国際教養学部 准教授 小松 久恵
第6回	10月22日 (金)	越境するメロドラマ的想像力：帝政期ロシアの メロドラマ映画と新派映画の比較を通じて	北海道大学大学院 文学研究院 准教授 小川 佐和子

◆ 境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN) 10周年記念展示 ◆

2021年7月1日から、北大総合博物館の境界研究ユニット・ブース(2階)で、境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN) の設立10周年を記念する特別展示が公開中です。JIBSNのこれまでの歩みと活動、国際チャーター便を使ったボーダーツーリズムを始め、年次集会の模様など盛りだくさんの内容です。また加盟10自治体から「イチオシ」の物品を提供いただき、展示に花を添えています。五島の鯛、小笠原の塩、標津の鮭ぶし、礼文のバフンウニ缶、隠岐の島の「竹島まんじゅう」、稚内の「林蔵まんじゅう」、竹富・波照間の銘酒「泡波」、与那国の黒糖が勢ぞろい。ひときわ目立つのが、ジャズのまち根室のライブ映像(イースト・ポイント・ジャズ・オーケストラ)。来場者には、対馬のヤマネコ・グッズのお土産もあります。[岩下/井上]

◆ NIHU・UBRJ実社会共創セミナー開催 ◆

2021年8月5日、NIHU・UBRJ実社会共創セミナーが北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター主催の下、名古屋外国語大学世界共生学部世界共生学科との共催で企画・実施されました。テーマは「ウポポイでの学び、ウポポイへの期待」です。2021年7月12日、民族共生象徴空間ウポポイが開業して1周年を迎えました。コロナ禍で入場者数こそ目標を下回りましたが、ウポポイそのものやアイヌ文化や歴史についてさまざまな議論を喚起したという意味で、「フォーラム」としての機能をすでに果たしていると言えます。本セミナーでは、国立アイヌ民族博物館での現代史展示を例として、我々がこの博物館で学ぶことができることについてまず知ることができました。次に、ウポポイが立地する白老町民の立場と、白老町で実地研修を行っている大学教員の立場から、ウポポイやアイヌ民族博物館での学びへの期待が披瀝され、来場者とウポポイでの学びについて共に熱い議論が交わされました。[岩下/井上]

◆ 連携セミナー「北方史と南方史の邂逅」の開催 ◆

2021年9月2日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・公募研究プロジェクト連携セミナー「北方史と南方史の邂逅」が、NIHU北東アジア地域研究事業・北大スラブ研拠点(NoA)境界研究ユニット(UBRJ)との共催で開催されました。北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターは、共同利用・共同研究拠点として公募による事

業を行っています。今回は、その柱の一つであるプロジェクト型のものから、サハリンを中心とする「北方史」プロジェクトと奄美を中心とする「南方史」プロジェクトの研究者たちによる合同セミナーを開催しました。セミナーの前半ではそれぞれの班のメンバーによる報告と討論が行われ、後半では視聴者にも参加いただき、近現代日本の北方史と南方史の接点をめぐる刺激的な議論が展開されました。[岩下／井上]

◆ ArCS IIの最初の研究成果の発表 ◆

2020年からの北極域研究加速プロジェクト (ArCS II) のなかで、「エネルギー資源開発と地域経済」と題する研究が、センターの田畑を代表者として始められましたが、このほど、その最初の成果が国際学術誌*Sustainability*に発表されました。これは、北極域におけるエネルギー資源開発が地域経済・社会に及ぼす影響を多角的に分析するための事例研究として、ロシア連邦サハ共和国において石油・ダイヤモンド開発が経済発展にどのような影響を及ぼしているかを分析したものです。研究上の新機軸としては、共和国レベルの統計データだけでなく、地方自治体 (36 の郡と市) レベルの総生産 (Gross Municipal Product)、鉱業生産、財政などのデータを分析し、石油とダイヤモンドでは異なる影響を及ぼしていることを明らかにしたことなどが挙げられます。ArCS IIはコロナ禍の中で開始され、このような研究では不可欠である現地調査ができない状況が続いていますが、この研究では北東連邦大学 (ヤクーツク市) の研究協力者にデータ収集や文献入手などの面での協力を求め、それらを活用して今回の成果をまとめています。より詳しくは、10月12日に出されたプレスリリースを参照ください。
<https://www.hokudai.ac.jp/news/2021/10/post-915.html> [田畑]

◆ ArCS II社会文化課題第2班研究会の開催 ◆

北極域研究加速プロジェクト (ArCS II) は、北極域の自然や社会のあらゆる事象を研究し、地球環境の変化に対応する道筋を探るための全国的な総合プロジェクトです。その11ある課題の一つ「社会文化課題」の中のサブ課題2「エネルギー資源開発と地域経済」主催の研究会が、8月21日 (土) にセンターで開かれました。対面とオンラインのハイブリッドで行われた研究会には、ArCS IIのメンバーのほか、共同研究のロシア側パートナーであるヤクーツク北東連邦大学や、ロシア科学アカデミーシベリア支部農業科学研究所の研究者が参加しました。日本語5本、英語4本、ロシア語3本の計12本の研究報告が行われ、その報告内容をもとに濃密な意見の交換がなされました。[後藤]

◆ 2020・2021年度外国人招へい教員 (外国人研究員) の現況 ◆

新型コロナウイルス感染症拡大の影響は大きく、今年度に延期となっていた2020年度外国人招へい教員 (外国人研究員) 4名および2021年度採用者5名の計9名 (内訳は前号参照) のうち、半数以上の5人の方の辞退が決まっています。ランコ・マタソビッチ、アナ・ヘドバーグ・オレーニナ、アリッサ・J・デブラシオ、ラウリ・メルクソー、セルゲイ・ラドチェンコの名氏です。

その一方で状況改善の兆しが見られ、安全を十分に確保できる体制が整ったため、センターには現在、ウルファトベク・アブドゥラスロフ氏が2021年8月22日～11月18日の予定で滞在中です。今年度中にさらに、イーゴリ・サーヴィン氏（2021年12月11日～2022年3月24日）、セルゲイ・ザハロフ氏（2021年12月13日～2022年3月25日）、アレクサンドル・オシポフ氏（2022年1月1日～3月25日）の来日が予定されています。[安達]

◆ 外国人招へい教員（外国人研究員）制度（FVFP）採用決定方法の変更 ◆

センターの外国人研究員制度は、1978年度から始まる長い歴史を持っていますが、2014年度に北大が各部局の外国人研究員制度を統合して全学の外国人招へい教員を創設し、翌年度から適用されました。これにより、センターが国際公募により選考した外国人招へい教員候補が全学の委員会で審査されるという二段階の選考システムとなり、採択者数が年によって大きく変動する、研究上の優先度の高い候補が採択されない、といった多くの問題が生じました。

この制度が国際共同研究によりよく役立つものになるようにするため交渉を続けた結果、このたび北大執行部のご配慮により、次年度以降の外国人招へい教員制度では、一定の経費の枠内で、センターの判断で採用を決定できるようになりました。外国人研究者の招へいはセンターの共同利用・共同研究拠点としての活動の中核でもあり、第4期中期目標・計画にむけたセンターの飛躍につながる一層の成果が期待されます。

これにともないセンターでは、今回の2022年度外国人招へい教員の採用から、従来の国際公募に加え、新たに「戦略的招へい」の κατηγοリーを設けることになりました。海外の著名な研究機関や協定校との交流強化、現地調査協力者との共同研究など、センターの重点的な研究課題に関する国際プロジェクト（共同研究、共著・共編著、学会等の組織づくり等）の実施による具体的な成果を目的として研究者を招へいするものです。戦略的招へい枠の導入によりSRCの外国人招へいは新たなステージに昇り、国際共同研究がこれまで以上に活発になることが期待されます。[安達／宇山]

◆ 2021年度中村・鈴川基金奨励研究員の決定と滞在 ◆

2021年度中村・鈴川基金奨励研究員は以下の2名（五十音順）に決定し、すでに滞在中で充実した研究活動を行いました。[仙石]

氏名	所属	予定滞在期間	専攻分野・研究テーマ
新田 愛	東京大学大学院総合文化研究科 博士課程	2021.7.21 ~ 8.10	グラジミル・ヴィソツキーの音楽活動および思想の調査：同時代のデニスソフ、グバイドゥーリナ、シュニトケとの共通点を探して
井伊 裕子	東京外国語大学大学院 博士後期課程	2021.9.10 ~ 9.25	トレチャコフを中心とした都市住民による移動 展覧会風景画の需要

◆ 第1回百瀬フェローの決定 ◆

百瀬宏・津田塾大学名誉教授のご寄付に基づき設立された百瀬基金による、第1回百瀬フェローがこの度、決定しました。百瀬フェローシップは、スラブ・ユーラシア地域を研究するテニ

ユアを目指しているポスドクの方を対象とした研究奨励制度ですが、このたびは4名の応募がありました。研究業績も一定の水準を満たし、研究計画もまとまった応募者が多いなか、センターで慎重に審議した結果、貞包和寛さんに2021年10月より、百瀬フェローの称号が与えられます。本制度が、若手研究者のキャリアアップ支援として学界に定着していくことを願っています。[岩下]

選考講評

採択者：貞包 和寛（さだかね・かずひろ）

研究課題名：戦間期ポーランドの言語政策に関する基盤研究 いわゆる「クレスイ諸法」を中心として

貞包氏は社会言語学を専門とし、特にポーランドの少数話者諸言語を分析対象として業績を出されています。特に2020年に刊行された著書『言語を仕分けるのは誰か：ポーランドの言語政策とマイノリティ』が審査過程で評価されました。本研究課題で貞包氏は視点を言語政策史に向け、社会言語学的な分析が不十分であった第二共和国時代のポーランド東部国境地域の言語を巡る諸法を、当時の国内外の広い文脈から多角的に分析します。優れた着目点かつ具体的な方法論で進められる貞包氏の新たな挑戦が、ポーランド社会言語学および隣接する学問領域に画期的な成果と展開をもたらすことが期待されます。

採用にあたっての抱負

貞包 和寛

このたび、SRC百瀬フェローシップに採用された貞包和寛です。本フェローシップは今年度より新たに設立されたものと側面しております。第1回目の採用者ということでとても光栄であり、同時に身が引き締まる思いです。今年10月よりフェローとして活動いたします。センターの皆様とお会いする機会を楽しみにしています。

私の専門はポーランドの言語政策です。博士論文ではポーランド国内のマイノリティ（民族的少数者）の言語を取り上げ、これらの言語が政策上どのように扱われているかをまとめました。幸いにも機会に恵まれて、博士論文を加筆・修正した単著を昨年出版することができました（『言語を仕分けるのは誰か ポーランドの言語政策とマイノリティ』明石書店、2020年）。拙著で恐縮ではありますが、お手にとって頂ければ幸いです。

今回の百瀬フェローシップでの研究は、私のこれまでの研究をより深化させるために行われるものです。これまで私は現代ポーランドの問題を研究してきましたが、今回の百瀬フェローシップでは戦間期ポーランドの言語政策を分析したいと考えています。戦間期ポーランドは国民の3割が非ポーランド系によって占められており、当時の欧州で多民族性・多言語性が最も高い国家でした。一方、123年間の三国分割の後に成立した新国家内はポーランド民族主義も強い政治勢力として存在していました。こうした相反する事情が共存するなか実施された言語政策は、社会言語学的に興味深い事例であることは言うまでもありません。そのなかで本研究は、1924年に成立した三つの法律、いわゆる「クレスイ諸法 *ustawy kresowe*」に注目します。クレスイ諸法はウクライナ系、ベラルーシ系が多かった当時の東部地域を対象とした法律です。戦間期ポーランドではポーランド語が唯一の「国家語 *język państwowy*」として指定されましたが、クレスイ諸法で定められた地域では、行政や立法の場においてウクライナ語、ベラルーシ語、リトアニア語の使用が部分的に許可されていました。本研究ではこれらクレスイ諸法を分析し、戦間期ポーランドの言語政策の狙いを明らかにしていきます。

残念ながら、戦間期ポーランドの言語政策に専門的関心を持つ者はポーランド国内でも少なく、法律分析に基づく実証的研究が求められます。微力ながら、本研究がそうした研究上の要請に応えられるものとなるよう努める所存です。どうぞよろしく願いいたします。

◆ 専任研究員セミナー ◆

8月24日：宇山智彦

報告：「学問の自由と有用性・効率性の間で：科学者代表機関の役割の歴史と現在」
 コメンテータ：隠岐さや香（名古屋大学）

提出されたペーパーは、今年5月にオンラインで開催された歴史学研究会大会特設部会「日本学術会議会員任命拒否問題の地平」での報告をもとに、同研究会の『歴史学研究』（2021年増刊号）掲載のための原稿ということでした。内容は、この問題を考えるうえで、制度的な面に着目し、学術団体と政府の関係や、学問の自由と有用性の緊張関係を歴史的に考察しようとしたものでした。フランス科学史の専門家であるコメンテータからは、戦前における前身組織（学術研究会議）の設立経緯、日本における科学者と国家の関係の理解の仕方、市場原理と学問の自由の関係などに関連して、歴史的・国際的な比較を踏まえたコメントや質問が出されました。その後の討論では、日本において国家から自立した公共空間が弱いということはどう理解するか、国家と学者の間の組織は必要なのか、また、そのような組織には何が期待されるのか、学問の自由と国家との関係を考えるうえで、理系と文系の違いが意味を持っているのかなど、様々な論点が出されました。ロシア、東中欧、中国の状況についても話が及びました。日本学術会議についてセンターの教員会議などで議論することはこれまであまりなかったのですが、このセミナーは同僚の考え方を知るよい機会ともなりました。[田畑]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース162号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[編集部]

6月7日 田村大（株式会社リ・パブリック、九州大）『『循環経済産業都市』の実現に向けた参加型デザインのプロセス—鹿児島県薩摩川内市のケースから』（UBRJ・NIHU実社会共創セミナー）

6月17日 Наталия Ананьева (МГУ), Михал Глушковски (Университет Николая Коперника), Motoki Nomachi (SRC), Глеб Пилипенко (Институт славяноведения РАН), “Современные исследования славянских диалектов в диаспорах” (SRC/ISSRAS共同研究会「スラブ言語学の潮流」)

6月24日 Milan Mihaljević (Old Church Slavonic Institute / Croatian Academy of Sciences and Arts), “The Place and the Role of the Church Slavonic Language in Medieval Croatian Culture” (SRCセミナー)

6月25日 諫早庸一（センター）「モンゴル帝国の崩壊：ユーラシアから考える〈14世紀の危機〉」（第37回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会）

7月1日 Alexander Maxwell (Victoria University of Wellington) “Eudovít Štúr’s Pan Slavism, or, Why a *Nářečja* is Really a Dialect After All” (SRCセミナー)

7月21日 Татьяна Вендина (Институт славяноведения РАН) “Старославянский язык и

его влияние на формирование концептосферы языка русской культуры” (SRCセミナー)

7月28日 Abel Polese (Dublin City University / Ritsumeikan University) “Informality as ‘the art of bypassing the state’ in Eurasian spaces (and beyond)” (SRCセミナー)

7月29日 新田愛 (東京大・院) 「A. シュニトケの音楽創作とJ. S. バッハ」(中村・鈴川基金奨励研究員報告会)

8月5日 「ウポポイでの学び、ウポポイへの期待」(UBRJ・NIHU 実社会共創セミナー) 登壇者: マーク・ウィンチェスター (国立アイヌ民族博物館)、貳又聖規 (白老町議会、Blue Salmon)、地田徹朗 (名古屋外国語大)

8月26日 諫早庸一 (センター) 「三水系の帝国としてのジョチ・ウルス」(北海道中央ユーラシア研究会第141回例会)

9月2日 菅原慶郎 (小樽市総合博物館) 「日露戦前期におけるサハリン島の漁場経営—日本人漁家: 岡田八十次家を中心に—」 町泰樹 (鹿児島工業高等専門学校) 「境界領域における国民化の諸相—明治期の与論島における民俗宗教の変容—」 (共同利用・共同研究拠点 公募研究プロジェクト連携セミナー「北方史と南方史の邂逅」)

9月9日 Katja Brankačec (Institute of Slavonic Studies of the CAS, Czechia), “German-West Slavic Contact in Word Formation: Calques, Semantic Shifts and the Emergence of New Word Formation Types” (SRCセミナー)

9月17日 青島陽子 (センター) 「ロシア帝国のナショナル・イマジネーション」(第38回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会)

9月22日 井伊裕子 (東京外国語大・院) 「移動展覧会風景画とトレチャコフ兄弟」(中村・鈴川基金奨励研究員報告会)

9月27日 Arto Mustajoki (University of Helsinki), “Почему люди не понимают друг друга?” (SRCセミナー)

10月8日 Bridget Drinka (University of Texas at San Antonio), “Perfects and Resultatives in the Circum-Baltic ‘Stratified Convergence Zone’: The Role of the Hansa” (SRCセミナー)

10月22日 「第二次ナゴルノ・カラバフ紛争: 境界への影響と地政学的変動」(スラブ・ユーラシア研究センター公募研究共同研究班セミナー) パネリスト: 廣瀬陽子 (慶應義塾大)、岩下明裕 (センター)、吉村貴之 (早稲田大)、今井宏平 (アジア経済研究所)、田中浩一郎 (慶應義塾大)、ダヴィド・ゴギナシュヴィリ (在日ジョージア大使館、慶應義塾大)、宇山智彦 (センター)

10月27日 Laura Janda (University of Tromsø – The Arctic University of Norway), “Following the Paths of Slavic Aspectual Prefixes” (SRCセミナー)

11月1日 Ulfat Abdurasulov (SRC), “Organizing Paper, Organizing Knowledge: The Impact of Bureaucratic Practices on Muscovy’s Knowledge of Central Asia” (SRCセミナー)

人事の動き

◆ 京都大学・東京外国語大学とクロスアポイントメントを実施 ◆

センターは、人文社会系の地域研究に係る教育研究の活性化・強化のため、京都大学東南アジア地域研究研究所 (CSEAS) および東京外国語大学アジア・アフリカ言語

文化研究所 (ILCAA) と、クロスアポイントメントに関する協定を締結しました。クロスアポイントメント制度は、研究者が複数の大学等と雇用契約を結び、各機関の責任の下で業務を行う仕組みです。

2021年10月1日より、CSEASの村上勇介教授、ILCAAの黒木英充教授がクロスアポイントメント適用教員となり、北海道大学教授として教育研究活動を行います。またセンターの長縄宣博教授が、同様に東京外国語大学教授として教育研究活動を行います。エフォート率は、それぞれの本務校が90%、クロスアポイントメントによる所属先が10%となります。

センターは、2004年4月に発足した地域研究コンソーシアム（現在、国内の大学・研究機関など104組織が加盟）の設立メンバーとなるなど、CSEASおよびILCAAと共に長年にわたり日本の地域研究をリードしてきました。また、京都大学地域研究統合情報センターを前身の一つとするCSEASが東南アジアだけでなく、南米や中央アジアなどの地域研究もカバーしていること、ILCAAがイスラームや中東研究に強みを持っていることから、スラブ・ユーラシア地域の教育研究を担う当センターと共同研究しうる分野も少なくなく、これまでも3機関での連携を進めてきました。

刻一刻と変化し予測が難しい世界的変動を読み解くためには、旧来の地域割りを超え、地域横断的に鳥瞰する総合的な研究力の強化が求められています。今回、センターは両研究所との人材交流も含めた共同研究体制を組み、このような時代の要請に積極的に対応することになりました。

北海道大学教授としてお迎えする村上教授は、ラテンアメリカ政治研究の第一人者であり、比較政治の分野でも学界をリードしており、センターの強みでもある中東欧との比較および境界研究（ボーダースタディーズ）との接合など、地域研究の広域化への貢献が期待されます。また、黒木教授は中東・イスラーム学の著名な専門家であり、スラブ・ユーラシア地域におけるイスラーム研究、中東とロシアを結びつけた国際政治の分析など新しい視座からの貢献が期待されます。東京外国語大学教授として勤務する長縄教授も、ILCAAのイスラーム学の研究にスラブ・ユーラシアの知見を加えることで、当該分野の地域研究に厚みを持たせる貢献が期待されます。

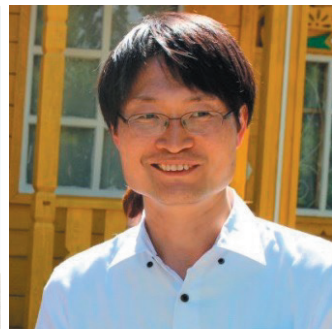
3名の教授はそれぞれ国際的な研究活動の経験も豊富であり、クロスアポイントメント制度を通じて、当センターはCSEASおよびILCAAと共に、日本の地域研究の国際的な発展のためにさらに努めていきたいと考えています。[岩下]



黒木英充教授



村上勇介教授



長縄宣博教授

Predrag Piper教授（1950–2021）のご逝去を悼む

野町素己（センター）

去る2021年9月10日（金）、セルビア学士院正会員、ベオグラード大学で長年スラブ語学の教鞭をとっておられたPredrag Piper名誉教授が他界した。ここ数年複数の病を患っておられたが、昨年大学を退職され、これからますますご自身の研究に励まれると思われた矢先のこと、また私自身は先生が亡くなる前日にメールをいただいたばかりだったので、大変な衝撃を受け、いまだに先生の死を実感持って受け止められていない。

Piper先生は旧ユーゴスラビア、セルビアを代表するスラブ語学者であり、スラブ語学の一時代を築いた世界的な言語学者Pavle IvićおよびMilka Ivić教授を中心とする、構造主義言語学のいわゆるNovi Sad学派出身の言語学者であった。ロシア語学者として研究者のキャリアをスタートさせたが、早くからスラブ語間の比較・対照研究に取り組み、1982年に『ロシア語、ポーランド語、セルビア・クロアチア語における代副詞』で博士号を取得された¹。Piper先生の研究の関心は構造主義的な文法研究にとどまることなく、その研究領域は師のMilka Ivić同様多岐にわたり、スラブ諸語を題材とした理論言語学（例えば2003年刊の『言語と空間』）、対照言語学（例えば2002年刊の『セルビア語と対照したロシア語文法』、2015年刊の『スラブ諸語の中のセルビア語』）、社会言語学（例えば2003年刊の『セルビア語：大言語と小言語の間で』）、スラブ文献学（例えば1998年刊の『スラブ学入門・第1巻』）、またキャリア後半では規範文法（例えば2005年刊の『セルビア語統語論・単文』、2018年刊の『セルビア語統語論複文』、2013年刊の『セルビア語規範文法』）やセルビア言語学史（例えば2011年刊の『セルビアにおけるスラブ学の歴史』、2018年刊の『セルビア・スラブ言語学の歴史：20世紀後半』）などの分野においても大きな足跡を残した。2015年の先生の65歳記念論集の資料によると、16冊の著書（再版・重版・改訂は差し引いた）、10冊の編著、213篇の論文、123篇の書評を刊行している²。亡くなった2021年までにこの数字はさらに大きくなっているはずである。

Piper先生の国内外の学術コミュニティへの貢献も大きい。例えば、スラブ言語文化研究の主要な雑誌であるЗборник Матице српске за славистикуおよびЈужнословенски филологの編集長を長く務められ、センターの研究誌*Acta Slavica Iaponica*も含めた国内外の多くの研究誌の諮問委員として名を連ねていた。国際スラビスト会議での重要な立場を歴任され、1963年に著名なBohuslav Havránekによって設立された伝統ある「スラブ諸語文法構造研究部会」の会長も務められている（2008–2013）。また、数多くの受賞歴があり、2003年にセルビア学士院準会員、2012年には正会員に、さらに2015年にはマケドニア学振外国人会員に選出されている。

スラブ学史に輝くPiper先生の膨大な学術的功績は、本稿の注2の記念論集や、これから様々な学術誌に掲載される追悼文で詳しくにされることになるだろう。筆者にも複数の研究誌から追悼文の執筆依頼が来ているので、ここではそれを繰り返すのではなく、著作などでは知る

1 博士論文はその後2冊の著書として刊行された。それぞれ *Zamenički prilozii (gramatički status i semantički tipovi)* (Novi Sad, 1983)、*Заменички прилози у српскохрватском, руском и пољском језику (Семантичка студија)* (Београд, 1988) である。なお、博士号取得の年だが、ご本人が書かれたものに1981年と1982年の両方がある。

2 *У простору лингвистичке славистике: Зборник научних радова поводом 65 година живота академика Предрага Пипера* (Београд, 2015)。なお、本書の表紙デザインはセンターの笹谷氏が担当し、スラブ・ユーラシア研究センターニュース144号に表紙が掲載されている。

ことができない、20年近くの交流で垣間見た大学者の人柄などを書き残しておきたい。特にSRCのスラブ語研究の発展にもある意味寄与した方なので、本誌に書く意味はあると思う。

筆者がPiper先生と知己を得たのは2002年の秋のことである。筆者は学生の時分からスラブ語間の比較・対照研究に関心があったが、私の所属していた大学にはそのような専門家はおらず、当時、図書館にも私が必要な十分な研究書や資料は無かったし、電子媒体で論文や本が手に入るような時代ではなかった。また少し上の世代には「複数のスラブ語に取り組むのは、いずれもモノにならないからご法度」のような雰囲気もあった。また、筆者の学科の先輩方はロシア語・文学研究者がほとんどだったので、博士課程に入ったら文部省の奨学金を得てモスクワ留学、まれにペテルブルク留学というのが定石になっていて、博士論文執筆のための資料収集や指導教員との意見交換がその目的であった。博士課程での留学なので当然のことである。ただ、筆者の場合は、将来執筆する博士論文のためだけでなく、自分の大学では知りえない「スラブ学」がどういった学問なのかを見渡したい、現地ではどのような研究・教育が行われているのか、同じ世代の学生はどのように勉強しているのかということに興味があった。そこで東西で行われているスラブ学に広く通じ、複数のスラブ諸語の運用能力を有し、かつそれらを並行して研究し、十分に教育活動も行い、かつ学術的に優れた成果を多く出している著名な研究者の指導を受けたいと思い、上記のMilka Ivić先生を経由してPredrag Piper先生にたどり着いた。思うに、Piper先生は私のいずれの希望も満たしている稀有な研究者であった³。

初めてPiper先生と会ったのは2002年9月のことである。留学はまだ決めていなかったのだが、まずは先生の著作もいくつか読んだので、話を直接伺ってみたいと思い、セルビアに先生を訪問した。ベオグラード大学文学部1階のスラブ学科にある研究室にお邪魔すると、「私がPredrag Piperです」とおっしゃり、手が痺れるくらい強めの握手をされた。先生と初めて会って握手した人が大抵驚くことであるが、これは相手に対する真摯な姿勢の印である。世間話もほとんどせず、先生は私がどのような研究をしたいのかを詳しく尋ねた。一通り私の話を聞いた後、「あなたの関心は十分博士論文のテーマになりますね」とおっしゃったので、私が念のため「私のような初心者が、複数のスラブ諸語を扱って比較研究することは可能だと本当に思いますか」と確認すると、「もちろん可能です。セルビアやその他のスラブ圏のロシア語学は対照研究で発展していて多くの蓄積がありますし、複数の言語を扱うことで、対象の言語の特徴がいろいろな角度から見えてきますから、アプローチとして自然です。スラブ語の場合、特に一見似通っているが、実は類型論的に重要な違いがあることはよくあります。ですから、むしろ複数のスラブ語を研究してください。確かに、日本人のあなたには最初は大変かもしれないが、時間はあります。私は大丈夫だと思います」と言われた。最後に「もしベオグラードに留学するつもりがあるならば、私が指導を引き受けられますから、次に会うまでに博士論文のための仮説、依拠する分析理論とそれを選んだ理由、博士論文の仮の章立て、参考文献をま

3 Piper先生は語学が得意だったようである。ご母堂がスロベニア人でスロベニア語はよく話せた。またある時ポーランド人と一緒に先生を訪問したときに、そのポーランド人はセルビア語を知らないの、共通の言葉はポーランド語であったが、その人はPiper先生には外国人の訛りがほとんどないことに驚嘆していた。なお、ロシア語はほぼ母語のようであり、ロシア人も知らない単語を使って、ロシア人が驚いていたのを見たことがある。2011年にPiper先生が来日したとき、当時のセンター長の望月哲男先生が「あなたはロシア語が大変上手ですね」とおっしゃった時に、Piper先生はやや驚いた感じで「しかし、これは私の職業ですよ」と答えて、会話が噛み合わないようであった。この背景には、ベオグラード大学も含めたヨーロッパの大学では、ロシア語専攻の授業は全てロシア語で行われているということがあつた。もちろん、先生自身は努力もしておられたようである。先生がウクライナ語やスロバキア語を勉強していたのは50代に入ってからだったと思う。英語はよどみなく話され、ドイツ語、フランス語、イタリア語もよくご存知であった。

とめてくるように」と指示された。また、当時ベオグラード大学のスラブ学科で行われていた研究プロジェクト「ロシア語・セルビア語対照研究」のために、機能文法の理論にあるempathyという概念を切り口に両語を対照する論文を書くことも提案された⁴。指導教員が当該分野を代表する専門家で、指導に熱心な教育者であり、テーマ自体に根拠不明瞭な「ご法度」もなく、教員が指導学生のキャリア形成に積極的に関わる姿勢だったので、まだ会って間もないのにも関わらず、一気にいろいろな心理的ハードルが取り除かれ、拍子抜けするほどであった。Piper先生はユーゴスラビア経済制裁が原因で西側の研究書（特に最新の分析理論）が手に入らないことから、1996-7年に韓国外国語大学校に客員教授として赴任した経験がある。だからアジア人にもある程度慣れていたのである。いずれにせよ、筆者はこれでベオグラード大学に留学することに決め、11月に再びセルビアを訪れることになった。

先生からはご自身のものも含めて、いくつか文学部の授業にも出席するように提案された。Piper先生の授業は、私から見ると見事なもので、綿密に準備され、はっきりとした口調でわかりやすく話される。冗談を交えて本筋からずれるようなことはなく、いつも時間どおりに終わった。ご本人執筆の教科書だけでは理解しえない内容も多くあり、学生も熱心に出席していたし、興味を持った学生が発言したり、自然に討論に発展したりすることも多かった。遅刻は一切認めず、授業が始まると講義室にカギをかける。また私語をする学生を教室から大胆に追い出すなど厳しさはあったが、何年も前に書いたノートの内容の更新をすることなくただ読み上げ、学生にそれを筆写させるような授業を行う教員もまだ多くいたので、私にとって先生の授業はあらゆる点で退屈せず、また自分が教員になった時のモデルにしたいと思うものであった。私は高名な研究者に指導を受けることで、最先端の研究や何か奥義のようなものを見ることができると思っていたのだが、それは大いに外れた。ご自身の専門的関心に基づく高度な講義もあったが、多くは基礎に重点を置く授業であった。



国際会議で発言する Piper 教授（2011年）

研究指導は、論文指導にとどまらない研究者育成という性質が前面に出ているように思う。大学での指導は朝8時あるいは9時が多かったが、これは先生が毎朝4時起床だからで、起床後はずらにご自身の研究活動が始まるのである。また、待ち合わせ時間に絶対遅刻しない方で、筆者が10分前に到着すると「さすが日本人、時間に正確ですね」と言われるが、いつも先にいらしている先生に対して恥ずかしく思ったものである。当時のセルビアは時間に大分ルーズで、1時間バスを待った挙句の果てに、同じバスが4台連続で停留所に来たり、大学教員が悪びれることなく授業に大幅に遅れたりすることも珍しくなかったので、生真面目すぎるほどのPiper先生がどうやって精神的な安寧を保って生きていられるの

4 このプロジェクトは紆余曲折があり、結局立ち消えになった。したがって、筆者による担当部分も刊行されることはなかった。Piper先生はこのプロジェクトでの成果をもとに、上記の『セルビア語と対照したロシア語文法』を上梓された。ただ、母語話者でもない外国人で会ったばかりの学生にそのようなチャンスを与えることに驚きを禁じ得なかった。

か不思議に思えた。また時計を見なくても毎回ちょうど1時間で指導は終わった。指導時間は学生に言わせることが中心だが、圧迫感があるものではなく、具体的で建設的なアドバイスを頂けるので、次の課題に取り組もうという気持ちで先生の部屋を去ることができた。論文指導は研究室の他に、静かな喫茶店の場合もあり、歴史あるレストランのこともあった。ときにベオグラードの有名な公園カレメグダンということもあった。他の学生は研究室での指導だったので、私は外国人の学生として特別扱いされていたように思うが、それでも先生は「私はあなたを外国人客とは思っていないから、他の学生と同様に扱います。また博士課程となれば、もうほぼ一人前の研究者だから要求水準も高くなります」とおっしゃり、先生が行かれる国内外の学会で発表することを指示され、また学会の参加報告記や研究書の書評など、いろいろな刊行物を積極的に出すことを要求された。研究者生活における多様な訓練を受けさせていたわけである。学会会場でもそういった指導は続く。休憩時間になると、先生は私を探し出し、世界の名だたるスラブ語研究者に紹介して下さり、会食の時は私を隣に座らせ、そういった研究者と積極的に話すように促された。人見知りの私には休憩も会食もつらいので、一度会食をサボったことがある。先生はそれに対して、珍しく割と明確に不満を口にされたので、これも指導の一環なのだと理解した。Piper先生は「良い組織者であることも研究者の重要な資質だ」とおっしゃっていたので、研究者としての人脈構築の手伝いをして下さっていたのだと思う。学会中、先生は大抵セクションからセクションに慌ただしく移動されるのだが、私の発表となると、事前に発表原稿をお見せしているにもかかわらず、例外なく発表を聴きに來られた。発表を終えて自分の席に向かうとき、先生は決まって私に視線を合わせ、親指を立てて微笑まれる、そして私はそれに会釈する。そして、セクションが終わると感想やコメントを下さる。これは先生が私の発表を聴く最後の機会となった2018年の国際スラビスト会議（於：ベオグラード）まで続いた。

学部生や修士課程の院生への教育も熱心であった。本来授業のない土曜日や日曜日に、学部1、2年生の希望者を様々な図書館に連れて行き、司書を交えて図書館の使い方などを教授し、国立博物館にセルビア最古の文書『ミロスラヴ福音書』を見学に連れて行ってセルビア文化史を解説されていたこともあった。そういった時は私も帯同させ、学部生と同じように指導をされた。また主に修士の院生のために、授業以外に非公式の言語学セミナーを組織され、学生に発表させるだけではなく自らも研究報告をされ、また具体的な論文や発表原稿の書き方なども指導し、専門家の育成にも力を注いでいた。高名な研究者が優れた教育者とは限らないが、Piper先生は明らかにその両方を具現していた。先生は大変多忙な方にも拘わらず、自分の貴重な休日を潰しながらも「何事もやり方がわからないと始められませんから、それを教えるのも教師の仕事です。そして教師が実践して見せるのが有効です」と笑顔で話されていた。本当によくできた方だと心から思った。

Piper先生は上下関係をとても重んじる方であり、昨今の西欧やアメリカで見られるような「平等」や、すぐに「君」の形式で呼ぶような関係はお好きではなかったようである。自分より年上の研究者に対しては、ご自身の格が遥かに高くても、常に敬意をもって丁寧に接しておられた。Piper先生の恩師のMilka Ivić先生はパソコンを使わない方だったので、Piper先生が女史の手書きの論文を代わりにパソコンに打ち込んでいた。学生のアルバイトのような作業も厭わなかった。ことあるごとに「あなたたち東アジアの文化は上下関係を大事にしているところが素晴らしい。しかしセルビアではそういう伝統は失われてしまった」と嘆いておられたが、無論、先生は年下に対してぞんざいに接するわけではなく、不必要に自分を大きく見せたり、自分の優位性をアピールしたりなど一切しなかった。知識と経験が豊富な年長者として、ある時は

助言しながら、ある時は実際に手を差し伸べて、別の時には自分でしばらく考えさせた。そして才能がなくとも頑張る人を応援する人であった。Piper先生から日本のスラブ語研究について尋ねられたときに、私は日本語で書かれた研究が多いから外国では知られていないが、優れた研究者も少なからずいるとお話ししたことが端緒となり、2011年に本邦初のスラブ語研究の本格的な国際シンポジウムが開催されることとなった。⁵欧米ではあまり知られていない日本のスラブ語研究者も仲間に取りこんでいきたいという先生自身のご意向もあったが、着任して以来SRCでスラブ語研究を進めることにあがいていた私をサポートするというお考えもあったようである。だから、国際会議前でお忙しいにも関わらず、北海道大学の学生を対象とする講義も進んで引き受けられ、加えて、私を上記の「スラブ諸語文法構造研究部会」の委員に推薦し、それも採択に導いた⁶。また最晩年まで*Acta Slavica Iaponica*のアドバイザーとして数多くの助言をくださった。

一言で言えば器の大きい人で、周りの人の成功は我がことのように喜び、失敗した人や弱い人に優しい方であった。2003年の春、文学部で研究指導が予定されていたのだが、体調がすぐれず先生にキャンセルとお詫びのご連絡をした。学生寮で寝転んで本を読んでいると、部屋の扉をたたく音がしたので、誰かと思って扉を開けるとPiper先生がたくさんのお菓子、風邪薬を持って立っておられた。私は予想外の来客で慌てふためいてお茶を入れようと立ち上がると「勉強は感心するが、今はやめてゆっくり休んで元気になりなさい」とおっしゃって帰られた。一方で、他人には自分の喜びや弱みを見せる人ではなかった。その意味で印象的だったのは2005年10月のことである。先生の講義を聴講していた私が講義後に教室を出ると、先生が講義室の扉の横で立っておられた。私を見つけると「研究室で少し話しませんか」とおっしゃるので、先生についていくと、刊行されたばかりの大著『セルビア語統語論・単文』⁷に対して底意地の悪い長文の書評が出たことを話され、大変落ち込んでおられたのである。弱みを見せない先生でもよほど辛かったのだらうと同情したが、こういったお姿を見たのは最初で最後であった。

先生の一つの特徴的な美徳は、重要な役職にある場合、それに執着しないで、ふさわしい後任を探して大胆に引き継いでいくことである。上記のスラブ語文法構造研究部会の委員であることはある種のステータスであり、事実委員は終身であることも多い。しかしPiper先生は会長を務めあげた後、後任を推薦され、委員自体を退任された。セルビア語標準化委員会会長、様々な研究誌の編集長も、実にふさわしい後任を見つけて退任されている。去り際が美しい人であるように思う。

「頭は冷静に、心は熱く生きなさい」、「良い学者になるのも大事だが、良い人間であることはもっと大事なことだ」、「最初に非難してはいけぬ。まず良いところをできる限り見つけなさい」、「怒りを捨てなさい。エネルギーの無駄遣いはいけぬ」など、実践できているかは別にして、今でも心の支えとなる教訓的な助言を数限りなく賜った。当時のユーゴスラビア、セルビアはいろいろな意味で限られた環境であり、私のベオグラード滞在もわずか2年弱という短い期間ではあった。がPiper先生のおかげで、充実した専門的な研究や教育が受けられたこと、今後の自身の研究・教育のモデルが得られたこと、また日本の大学院生活では想像すらでき

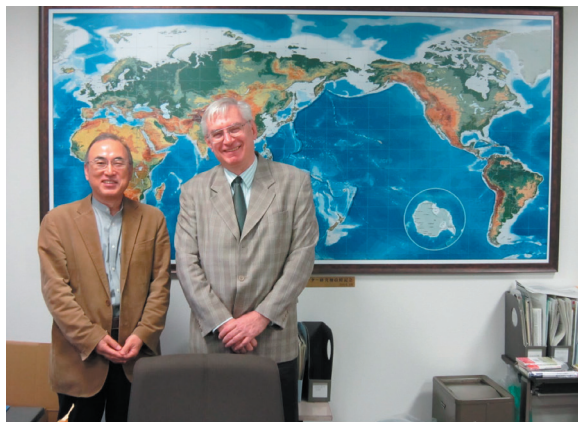
5 2011年11月11日～13日に開催された国際スラビスト会議スラブ語文法構造研究部会の年次集会を基礎とした「スラブ諸語における文法化と語彙化」である。

https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/2011_1111_13/index-j.html

6 部会委員になるには委員3名の推薦と業績表に基づく審査と投票がある。私は十分な実力も業績もなかったが、それでもVictor Friedman教授とZuzanna Topolińska教授とともに熱心に推薦してくださったと後から聞いた。

ない学術活動や専門家とのネットワーク構築が実現できたことは、自分のキャリアにとって実に重要なことであった。しかしそれ以上に、誰にも代えられない人生の師を得たことは、間違いなく生涯で最大の幸せの一つであった。

苗字Piperから判断するに、ご先祖はモンテネグロ出身であろう。またご尊父はセルビア人、ご母堂はスロベニア人であった。その反動もあってか、ご本人は誰よりもセルビア人であることを誇りに思い、研究活動を通じて母



左から望月哲男センター長（当時）と Predrag Piper 教授
（2011年11月）

国に貢献した人生であった。2003年8月、リュブリャナで国際会議が開催されていた時、宿舎から学会会場に向かう途中で、セルビアの生活にやや不満を感じていた私は「先生はセルビアからもっと条件の良い国に亡命した方がいいのではないですか」と無神経な提案をしたことがある。先生は驚きも怒りもせず「今のセルビアは確かに貧しい。不幸なことに私はそういう時代に生まれた。しかし私よりも大変な境遇の人は多くいて、私はまだ恵まれた方だ。私に同胞は捨てられない。私が専門を通じて祖国にできることは沢山あるから亡命はしません」と穏やかに答えられた。Piper先生はセルビアや同胞のために大いに尽くされた。だがそれだけではない。間接的にも直接的にも世界のスラブ語研究の発展にも尽くされた。損失は計り知れない。

晩年、先生は文学部の大きな研究室から、誰も気づかない小さな物置のような部屋に移された。先生は「いろいろな人が私に会いに来て話すから時間がなくて困る。私を見つけにくい部屋を探しぬきました。でもあなたは例外ですよ。いつでも来てください」とにこやかに話されていた。先生の部屋を見つけた人には同じことを言って、全員「例外」として振る舞っていたのだろうと思う。約20年間私自身は先生とはすばらしい時間を過ごしたが、同時に、今更ながら大いに心配をかけ、多大なご迷惑をかけた。結果として先生から多くの時間を奪ってしまったと思う。今はただただ深い感謝と痛恨の念が入り混じる気持ちである。もし死後の世界があるならば、いつか再会を願うのみである。それまでは先生の教えを次の世代に伝えたいと改めて考える。

プリンストン高等研究所の（リモート）研究員となって

長縄宣博（センター）

「好奇心の翼を広げて研究生活を送ってください」。1月12日午前5時、私は家でパソコンの画面越しにロベルト・ダイクラーフ所長のウェルカム・スピーチを聞いていた。そのスピーチの中心はプリンストン高等研究所の沿革だったが、その内容は、東京大学出版会から昨年翻訳が出た『役に立たない 科学が役に立つ』に詳しい。同書で私に発破を掛けたのも次の一

節である。明日の世界へとつづく研究とは、「妨げられることのない好奇心、現実的な考察の流れに逆らってはるか上流へとさかのぼろうとする気概、そして、それを楽しむ心によってなされるのだ」(13頁)。ダイクラーフ所長はスピーチで次のようにも語った。「不謹慎かもしれないが、申請書で提案した研究テーマから外れるように、自由に研究してください」。Curiosity-driven research —これこそが、プリンストン高等研究所の金科玉条であり、その時、概算要求の書類作成や研究機関の評価の作文で忙しかった私には、好奇心という単純かつ純粋な研究動機がとてども崇高に響いたのだった。

2020-21年の第2タームに(1月から7月まで)、プリンストン高等研究所(IAS)歴史学院のWilliam D. Loughlin Member(招聘研究員)の資格を得た。IASは、歴史学、数学、自然科学、社会科学の四つの学院(School)から構成され、School of Historical StudiesはFaculty, Member, Visitorの計70名ほどが在籍する。歴史学院は、洋の東西を問わず古代から20世紀のありとあらゆる研究をカバーし、世代もポストドク以降すべての世代にわたる。2020年度のメンバーは46名で、そのうちスラブ・ユーラシア研究者は3名。私以外には、ソ連建築の研究で新進気鋭のアンナ・ボコフ(Anna Bokov)さん、帝政ロシアのメディアや娯楽の研究で知られ、現在はロシア帝国と考古学というテーマに取り組んでいるルイズ・マクレイノルズ(Louise McReynolds)先生がいた。そもそも2019年10月に提出した申請書類は、CV、1500語以内の研究計画書とその参考文献リスト一枚、代表的な論文3本というとても簡素なもので、まさか採用されるとは夢にも思わず、翌2月に採用通知がメール届いた時にはスパムかと思い、封書で届いた時にはとんでもないことになったと驚いた。

私の研究テーマは、Making an Anti-imperialist Empire: Revolutionary Russia and the Muslim Worldというもので、カリム・ハキーモフ(1890-1938)というタタール人革命家・ソ連外交官の生涯と彼が活動した地域の視点からロシアの帝国の崩壊と再生、そしてそれが中東の国際秩序に与えた衝撃を描こうとするものである。最初にこの人物と出会ったのは、2009年にスラ研のご厚意で滞在したコロンビア大学の図書館だった。試行錯誤の十年の歳月を経てようやくこの人物を、学術的な議論の俎上に置くことができるようになったわけだ。

招聘研究員は基本的には何の義務もなく、好奇心の赴くままに自分の研究を進めればよい。研究員は毎週月曜日の昼食時に開かれるweekly colloquiumで自分の研究についてトークをすることができる。毎日メーリングリストでトーク、歴史学院関係者やプリンストン大学のセミナーの情報が流れてきて、面白いテーマが目白押しだったものの、時差が冬は14時間(夏は13時間)なので、日本で日常生活を送らなければならない私はほとんど出席できず、忸怩たる思いだった。歴史学院は8部門に分かれており、私の形式的な所属は、E.H.カーの弟子で、冷戦史研究で著名なジョナサン・ハスラム先生率いるInternational Historyだった。研究所自体が6月頭まで一切の対面のコミュニケーションができない状況だったこともあり、高齢のハスラム先生もイギリスのケンブリッジで暮らされていたが、3月2日と6日にスカイプで私の論文の草稿に基づいて面談して下さった。

私がZoomでweekly colloquiumを持つことができたのは3月8日である。マクレイノルズ先生は「国際婦人デーおめでとう」とチャットに書き込んでくれた。司会は、モンゴル帝国はじめ中華帝国と遊牧民との関係を幅広く研究されているニコラ・ディ・コスモ(Nicola di Cosmo)先生が引き受けられた。ここで私は、Officious Aliens: Tatars' Involvement in the Central Asian Revolutionと題して、ハキーモフの内戦期中央アジア(とくにタシュケントとブハラ)での暗躍について30分ほど話した。その後30分の質疑応答では、まずディ・コスモ先生がカザフ人も中央アジアで帝国統治の媒介者になりえたはずだが、タタール人との違いは何かと切

り出された。続いてマクレイノルズ先生とアンナ・ボコフさんが、こうしたタタール人革命家は帝政期にどのように形成されたのか、タタール人の活動は新しいコロニアリズムとして理解すべきなのかどうかと問われた。また、ディ・コスモ先生と15-16世紀のオスマン帝国を専門とするディミトリ・カストリツィス(Dimitri Kastritsis)先生は、革命期中央アジアにおけるロシア語・現地語・タタール語の関係について質問された。当時私は、*Kritika*誌からの査読結果を踏まえて修正作業に取り掛かっていたところだったので、的確な射撃のような数々の質問は大いに刺激的だった(2021年度中には*Kritika*に掲載されるはず)。

4月末、ニューヨーク大学のブルース・グラントさんから「無事プリンストンに着いたかい?」とメールが来た。グラントさんとジェイン・バーバンク先生は、私の1月からの滞在を前提に2月16日に同大ロシア研究センター(ジョーダン・センター)で、IASでの研究テーマの全体像について話す機会を設けてくださった。結局、私は自宅から夜12時にZoomで出演することになった。おそらく対面のセミナーでは参加者は10名ほどになっていただろうが、ジョーダン・センターの宣伝力には感心した。ロシア、中東、ヨーロッパから友人たちが参加して質問してくれただけでも心強かったが、トークの途中も参加者数は増加を続け、ついには98名に達した。このセミナーの後で、できれば4月半ばにはプリンストンに行きたいとグラントさんに伝えたのだった。グラントさんから4月末にメールが来た時、私は全く確信がなかった。5月にはまだ北大は行かせてくれそうもない。IAS自体まだ対面のコミュニケーションを解禁していないようだ。6月になればIASやプリンストン大学には人がいなくなるのではないか。自由だが孤独に本を読む生活というのはいいのだろうか。それでも行く価値はあるのだろうか。私は自分の不安を率直に書いて返信した。するとすぐに返事が来た。「イエスだ。可能性があるなら必ず行くべきだ」。その後、岩下センター長、大久保係長、坂口さんのご尽力で出国の目途がつくと、グラントさんは極めて詳細な生活上のアドバイスを立て続けに書いてきてくださった。こうして5月26日ようやく出国できた。

IASには夕立の上がった同日7時過ぎに到着した。有名なFuld Hallの入り口で鍵と手引きを受け取って宿舎に入った。そこから6月6日まで自分のアパートで待機(隔離)することになった。部屋はとても清潔で広く、大きな窓の外も青々した芝生が広がり、一日中部屋で過ごしても少しも苦痛ではなかった。IASと研究員の住宅は文字通り森の中にあり、リス、ウサギ、シカが顔を出し、昼間はセミの声がかしましく、夜はホタルが舞う緑豊かな場所だった。天候にも恵まれたので、とてもよい休暇に來たのだとすぐに割り切ることができた。ただ、食事や買い物



Fuld Hall

は不便だった。もちろん研究所にも小さな店があり食堂もあるが、待機期間中は宿舎以外、研究所のどの建物にも入れないようにカードキーが設定されていたのだ。プリンストン大学直結の小さな鉄道駅に隣接するコンビニのような店まで徒歩で20分、まとまった買い物をするには、プリンストン大学の学生街まで30分程度歩かなければならない(途中、かつてアインシュタインが住んでいた家を通り過ぎる)。長期滞在者には、デリバリーのサービスやショッ

ピングモールへのツアーがある。

アメリカはワクチン接種が進んでいたもので、住所が確定すると出国前に、最寄りのプリンストン大学のワクチン接種会場に予約を入れた。この会場ではファイザーを受けられ、1回目を6月1日に済ますと、2回目は自動的に6月23日に設定された。1回目を受けた時、大きな安堵感に包まれた。というのも研究所では、ワクチンをしているか否かで行動がかなり差別化されるからだ。隔離期間しかり。また、基本的には屋内ではマスクをつけることになっているものの、ワクチンを2回接種した人は、マスクを取ってもよいことになっていた。6月7日は満を持した研究所への出勤初日だったが、カードキーの設定を変えてもらうのに一苦労だった。そして、すべての研究員は毎朝、健康状態に異常がないかシステムを通じて報告することが義務付けられていた。

とはいえ、IASは間違いなく研究者の天国だ。とりわけ図書館は、研究者の要望の隅々にまで行き届いたサービスを展開しており素晴らしい。隔離期間中は、図書館の人が本を宿舍まで届けてくれた。3月にハスラム先生と面談した際、戦間期ソ連外交の資料集をもっと丁寧に見たほうがいいと忠告を受けていたこともあり、私はこの期間を利用して、北大図書館にも入っているが、ゆっくり眺めることができないでいた十数巻に目を通し、ノートを作ることができた。IASの図書館は、プリンストン大学の図書館 (Firestone) と提携しており、毎週水曜日に本を届けてくれる。前日までに研究所の図書館のシステムを通じて注文を出し、本を受け取ると、必要なページのスキャンも図書館の人がやってくれる。私はこの仕組みを使って、戦間期のイ



プリンストン大学の図書館カードとIASのカードキー

ラン・ソ連関係に関するロシア語とペルシア語の文献調査をした (ハキーモフはブハラの後、1921-24年にイラン北部のマシュハドとラシュトで領事を務めている)。また研究員は、プリンストン大学の専任教員と同様の権限で、大学図書館のリソースを使うことができる。しかし大変残念ながら、滞在中はFirestoneの立ち入りが厳しく制限されていたので、巨大な書庫を歩き回って珍しい本と遭遇するという経験はできなかった。

私は基本的には、午前中は宿舍で史料を読み、書き物をし、研究所の食堂で昼食をとり、それから図書館に調べものに行き、West Building一階の北隅にある個室の研究室101で作業をするという生活をしてきた。初出勤から1週間で、フェアウェル・パーティーがあり、6月18日にはもう成果報告書を提出しなければならなかった。さて、あと1ヵ月どのように過ごそうか。そんなことを考え始めた時、行動のきっかけになったのは、IASのサイトのトップページに掲載されていた、近年黒死病の研究で有名な中世医学史家モニカ・グリーン氏が2014年に滞在した時のエッセイだ (<https://www.IAS.edu/ideas/2014/green-IAS>)。それを読んでほっとしたのは、この研究所の醍醐味が全く専門の異なる研究者と昼食やコーヒーを共にして話し込むことで自分の研究に化学反応を起こすことにあると気付いたからだ。平日午後3時から4時に、Fuld Hall一階広間で、コーヒー、クッキー、果物が無料でふるまわれる。しかし、今年是这样した対面のコミュニケーションが解禁されたのも、6月に入ってからだ。そこで私も意を決して、研究室並びの廊下でドアの空いていた研究室をノックした。シェレン・ウさん (Shellen Wu, テネシー大学) は、20世紀中国の技術移転史、とりわけ石炭開発や農学者の研究で著名な方だ。もう数日後には研究所を離れる

ということで、部屋の片づけをされていたのだが、私も20世紀のトランスナショナルヒストリーに関心があるのだと力んで自己紹介すると、じゃあコーヒーでも飲みに行こうか、ということになった。私にはASEEESの雑踏の渦中で忙しく手短かに意見交換する強迫観念がこびり付いていたので、この単純さは拍子抜けだった。ウさんからは、マクレイノルズ先生も滞在していたのだが、冬期の雪深い中での対面制限があまりに過酷で孤立感が深かったので帰ってしまったと聞いた。

こうして遅ればせながら対話の一步を踏み出したのが、果たして今年は、調査旅行や休暇に出かけられないので、意外に人と会うことができた。まず、3月の研究会で司会を引き受けてくださったニコラ・ディ・コスモ先生と昼食をご一緒した。先生は近年、モンゴル帝国拡大の要因を気候変動に探る研究をされている。素人考えで、気候変動のような緩慢な長期的な現象は史料の記述にどのように現れるのでしょうかと伺うと、「いやいや、気候は1年単位でも激変して、それが歴史の展開に決定的な要因の一部となりうる」、「確かに史料には僅かな言及しかないのだが、それを注意深く拾って気象データと照らし合わせるといろいろな解釈が導き出せる」と答えられた。そうしたことを聞いていると、隔離期間中に眺めていたソ連外交の資料集に現れるイランとの国境地域の話が浮かんだ。1920年代はソ連とイランで交互に飢餓が生じ、カスピ海の漁獲量、蝗害、水利が協力と紛争の原因となっている。これをカスピ海南北の気候変動で考えることができるのではないかと。後日、モンゴル帝国の終焉と気候変動との関係を研究している諫早庸一氏にこの思い付きを話してみると、これは意外にありうる話かもしれないとのことだった。諫早氏もディ・コスモ先生と連絡を取り始めているので、13・14世紀から今日に至るユーラシア史と気候変動の共同研究に発展することが期待される。

IASの専任研究員でお話できればいいなど滞在前から思っていたのが、サビネ・シュミトケ (Sabine Schmidtke) 先生で、シーア派を中心とするイスラーム知識人研究の第一人者だ。先生は近年、欧米におけるシーア研究の礎を築いたドイツ人研究者Rudolf Strothmannがザイド派の王国があったイエメンを1930年に調査した時の日記を編集して出版しようとしていた。図書館の相互貸借のカートに本を取りに行った際、「サビネ・シュミトケ」の札が付いている本に気付き、まだ先生がプリンストンを離れていないと知ると、すぐに研究室からメールをしてみた。すると間もなく、「え、ハキーモフの研究をしているの?」と返事がきた。その後、メールを数往復すると、編集中のStrothmannの日記のファイルを見せていただいた。驚くべきことに、この300頁近いファイルにハキーモフが100か所以上言及されているのだ。どうやら、Strothmannが1930年3月にイエメンに入った時、水先案内を引き受けたのが、当時ソ連の通商代表を務めていたハキーモフらしい。ハキーモフは道中このドイツ人東洋学者に鶏肉を焼いたり、コーヒーを淹れたりし、サナア到着後は自宅に泊ませもしたようだ。これはいよいよ面白いということになり、シュミトケ先生は私を自宅に招いてくれた。その日は2時間ほどハキーモフについて話し込んだ。その後は、戦間期のイエメンに関するアラビア語などの文献もお借りした。

IASの専任研究員は極めて多忙なはずだが、滞在している研究員との会話には時間を惜しまない。また、専門が全く異なるとしても、非常に面白そうに耳を傾けてくださる。ASEEESで慌ただしく話す人々だと、私の拙い英語にたちまち失望が顔に現れるところだ。とくに印象に残ったのは、古代ギリシア文学の専門家にして、現代までをカバーする科学史の権威ハインリヒ・フォン・シュターデン (Heinrich von Staden) 先生だ。この物静かな大学者は非常に気さくで、廊下ですれちがっても「やあ、ノリ元気かい、今度昼食でもどう?」と、一介の外国人の名前を憶えていた(私も失礼して、ハインリヒと呼んでいた)。昼食をご一緒して話をうかがうと、実

は、彼と全く同じ名前の祖先は16世紀のバルト地方（リヴォニア）に移って、イヴァン雷帝にも謁見したという。その人物は、モスクワ国家について記録も残っていて、実は英訳もある（*The Land and Government of Muscovy: A Sixteenthcentury Account*）。バルト・ドイツ人と同じようにタタール人も広大なロシアの帝国を渡り歩く権力の仲介者としての側面がありましたと私が話すと、それは物凄く面白い話だねえ、と本当に楽しそうだった。この底なしの好奇心に私は甚く感銘を受けた。

滞在中は、プリンストン大学とニューヨーク大学の先生方にも面会できた。プリンストン大学の旧知のマイケル・レイノルズ（Michael Reynolds）さんはサバティカルでイスタンブルにいてというので、アラビア半島の現代史を専門とするバーナード・ハイケル（Bernard Haykel）先生を紹介してもらった。面会の前日までレバノンとサウジアラビアに調査に出かけていたというハイケル先生も、帰国後の疲れや忙しさにもかかわらず、大学近くのレバノン系の店で昼食の時間を見つけてくださった。先生は Institute for Transregional Study of the Contemporary Middle East を主宰しており、スラ研も今後、中東研究者との国際的な連携を強めたいという話をすると大いに関心を持たれたようだった。

ニューヨークには三回行った。宿舎からは列車を乗り継いで2時間の旅だ。6月14日には、細かく生活上の助言をくださったブルース・グラントさんと再会し、ニューヨーク大学周辺を案内してもらった。これはマンハッタンのフィールドワークという趣もあり、とことん歩き回りしゃべり続けた。グラントさんは、路上生活者の増加に加え、昨年のBLM運動以来、警察への不信・不服従が広がって、地下鉄や公園で治安が悪くなっていることをひどく心配されていた。ジェイン・バーバンク先生とフレデリック・クーパー先生には6月19日と7月10日の二回、ご自宅に招待していただき、手料理を振舞っていただいた。お二人は、*Empires in World History* に続く作品として、*Post-Imperial Possibilities* という20世紀史を執筆中とのことだった。ちょうど私も20世紀史に関わる論集の構想があったので、いろいろアイデアをご教示いただいた。7月時点で3/4くらい書き上げたとおっしゃっていたので、近々我々も手に取ることになるだろう。

こうして短いプリンストン滞在が終わった。IAS滞在中は、自分が場違いなところにいるという感覚が常にあり、専任研究員をはじめとする学者たちの際限ない学識、尽きることのない好奇心、そして慎み深さの前で、自分がとても小さかつまらない存在であることをつくづく自覚した。そして、今後研究を進める上でのいろいろなヒントを得て、ようやく研究のスタートラインに立ったような気持ちになった。ハキーモフの本を書き上げた後の研究課題で再びここに来れるだろうか。私の好奇心は尽きてしまわないだろうか。出発前の晩、そんなことを考えながら散歩し、乱舞するホテルの光を眺めた。



ジェイン・バーバンク先生と
フレデリック・クーパー先生

IMC 2021参加記 —プライザー＝カペラー氏の基調講演を中心に—

諫早庸一（センター）

2021年7月5日から9日の5日間、IMC 2021が行われた。IMCとはLeeds International Medieval Congressの略で、毎年リーズ大学中世学研究所を母体として行われる中世史大会であり、アメリカの西ミシガン大学で行われるInternational Congress on Medieval Studiesとやらんで、毎年開催される中世史の国際大会としては最も大規模なもの1つである。もちろん欧米圏においては歴史的に「中世史 (Medieval studies)」とはそのままヨーロッパ中世史の意であり、現在においてもその傾向は少なくとも薄くはない。しかし、このリーズ国際中世史大会においては特に近年、そうしたヨーロッパ中心の傾向を見直す動きが強まっている¹。特に今年は「気候 (Climates)」——ただし英語の語義に沿って「風潮/情勢」といったものも含む——というヨーロッパに留まりえないトピックが主題となっていた関係で、地域の枠を超えた報告も数々見られた。

この大会は例年7月の1週目に開催されており、スラブ・ユーラシア研究センターの夏期国際シンポジウムの日程とももの見事に重なってしまう。しかし、今回は新型コロナウイルスの世界的流行を受け、2021年大会 (<https://www.imc.leeds.ac.uk/imc-2021/>) と夏期国際シンポジウムがともにオンラインでの開催となったため、いずれにも参加がなかった。筆者が代表者となっている科学研究費助成事業（基盤研究B）「14世紀の危機」についての文理協働研究（課題番号: 21H00555）は環境史研究であり、まさに中世期における「気候」を主題としている関係もあって、逃すことのできない大会であった。参加費は科研費から支出し、当該科研のメンバーからは諫早と中塚武（名古屋大学）が参加した（報告はなし）。

日本時間では深夜帯での開催となったが複数回の基調講演を含め、数セッションに参加し、大いに刺激を受けた。分けても、基調講演者の1人であり、ビザンツ史を元来の専門としながらも、現在中世期の環境史研究を主導するヨハネス・プライザー＝カペラー氏（オーストリア科学アカデミー）の講演が非常に重要なものに思われたため、今回はその内容をまとめることで、参加記に代えたい²。

プライザー＝カペラー氏の基調講演は大会3日目に行われた。そのタイトルは、“Crusaders of Climate Change? The Debate on Global Warming between the Medieval and the Present Age”、彼の十字軍/ Crusadersが対象とするのはイェルサレムではなく、例えば「中世温暖期 (Medieval Warm Period)」と名付けられてきたような中世の気候変動である。

20世紀半ばに地球規模の温暖化が認識されるに至り、「科学的」な知見に基づいた幾つか

1 筆者が以前に参加して報告を行った2017年大会——テーマは「他者性 (Otherness)」——では、EU圏外から参加する非ヨーロッパ地域の専門家の話を聞くという趣旨で指名され、インタビューを受けた。
(<https://mymedia.leeds.ac.uk/Mediasite/Play/342d4df791c54d42bb8a9fe22cc91ad01d>)

2 ヨハネス・プライザー＝カペラー氏は、気候と人間社会・政治・経済との相互作用 (interplay) を、人新世の始まりから中世期までアフロ・ユーラシア規模で語る2巻本の大作を上梓したばかりである (Johannes Preiser-Kapeller, *Die erste Ernte und der große Hunger: Klima, Pandemien und der Wandel der Alten Welt bis 500 n. Chr.* Wien & Berlin: Mandelbaum Verlag, 2021; Johannes Preiser-Kapeller, *Der Lange Sommer und die Kleine Eiszeit: Klima, Pandemien und der Wandel der Alten Welt von 500 bis 1500 n. Chr.* Wien & Berlin: Mandelbaum Verlag, 2021.)。氏は2019年には来日して、スラブ・ユーラシア研究センターでも講演を行った。その来日講演については報告記がある (小澤実 & 諫早庸一「ウィーン発の中世グローバルヒストリー：ヨハネス・プライザー＝カペラー博士連続講演会」『史苑』80/2 (2020): 114-134)。

の議論は、中世の温暖期を現代の温暖化に比する、あるいはそれ以上の規模のものであったとしている。しかし、これは大きな誤りであるとプライザー＝カペラー氏は指摘する。古気候データの総合は、いわゆる中世の温暖期が一貫して温暖であったという見解を否定しているのである。そもそも「中世温暖期」がいつからいつまでであったのかという部分に関しても、研究者たちの見解は一致していない。それは時期的にも地域的にも大きな偏差を有するものなのであった。

さらにプライザー＝カペラー氏は中世環境史研究の先駆的存在であるクリスチャン・フィスターから「社会のアーカイブス (Archives of Society)」と「自然のアーカイブス (Archives of Nature)」という表現を借用する。それらは簡単に言えば、前者が環境について書かれたもの、後者が古気候データということになる。前者の特に中世期に関しては、エジプトのナイロメーターや日本の桜の開花記録など経時的なものも見られるが、概してその数は多くない。「ただし」と続けるプライザー＝カペラー氏は、一般的に前者よりも万能と考えられている後者についても、それが採取されている地域には偏りがあり、またそれぞれのデータが示す数字も多様であることを指摘する。「自然のアーカイブス」も「社会のアーカイブス」と同じく試料批判が大いに必要であり、その意味で両者に大きな違いはないのである。

一方でこうした偏差を考慮したうえで、確かに中世期においては気候に関して一定のトレンドが存在するように見える。ただし、それは安定した温暖期とは言い得ないとプライザー＝カペラー氏は強調した。こうした理解に基づき、プライザー＝カペラー氏は「中世温暖期」よりも「中世気候異常期 (Medieval Climate Anomaly)」という表現を使う。さらにヨーロッパ史の文脈では「中世気候最適期 (Medieval Climate Optimum)」という表現も使われる。10世紀から13世紀にかけての時代、気候の安定を背景に、ヨーロッパは高い経済発展と人口の増加を経験しているのである。ただし、そうした発展の予兆はすでに「最適期」以前から見る事ができるということもプライザー＝カペラー氏は指摘している。

プライザー＝カペラー氏はさらに気温以外にも大気の影響を議論する。それは地球規模の遠隔相関 (teleconnections) を考慮すべき局面である。この種の遠隔相関は北大西洋振動やエルニーニョ・南方振動として現れ、例えば南太平洋のエルニーニョ現象は、赤道付近に沿うインド洋海域の乾湿に大きな影響を与える。ヴィクター・リーバーマンが主著『奇妙な並行 (Strange Parallels)』のなかで、ヨーロッパと東南アジアの中世期における繁栄の並行性を描いているのは有名であるが、古気候データに関しては古いものに依拠しているとプライザー＝カペラー氏は語る。

今や環境史は気候と社会経済との直線的な関連性を超えて、気候変動と地域の生態系および人間社会との相互作用 (interplay) を描くべき段階に来ているとプライザー＝カペラー氏は主張する。中世社会は特にその地域の自然環境に強く規定されていた。そしてエコ・システムの弾性は人間と気候変動の相互作用によって大きく変動していた。自然環境における人間の役割も中世期においてすら、非常に大きなものであったのである。例えば小氷期のような大きな気候変動期においても、人間社会は「崩壊」していない。それによって人間と自然とは新たなエコ・システムを生み出していったのである。例えばアイスランドは小氷期が始まる14～15世紀において漁業を大きく拡大させていく。それはヨーロッパの「社会の新陳代謝 (social metabolism)」を促す規模のものであった。この種の新陳代謝は「帝国の生態 (imperial ecology)」と名付けられるような、大規模政体による穀物や資源および資産の移動によっても担われてきた。それは例えば中国の北宋王朝 (960～1126年) によっても実践され、同王朝の社会は大幅な人口増を実現したのである。

ただし、「中世気候最適期」にも寒冷期が存在していたことは、この講演の前半でプライザー＝カペラー氏が指摘するところであった。太陽活動の減退の時期である「オールド極小期 (Ort Minimum)」は、1020/40年から1080年にかけて北半球の多くの政体に危機を招来することになる。北宋が黄河氾濫に苦しむのもまさにこの時期においてのことなのであった。1077/78年、北朝政府は黄河の大掛かりな転流を行う。ビザンツ帝国もまた1025年頃にその最盛期を終えている。ただしビザンツ帝国は、ギリシアやアナトリアといった領内においてその時代の気候変動に適応する形で農業拡大を行い、「社会の新陳代謝」を実現してもいた。

こうした観点から見れば、10世紀中葉から11世紀後半にかけての東地中海世界社会の減退を描いたロニー・エレンブルムの『東地中海の崩壊 (*The Collapse of the Eastern Mediterranean*)』は若干の修正を余儀なくされるとプライザー＝カペラー氏は語る。当時相当程度縮小していたビザンツ帝国領内のみにおいても気候の偏差は大きく、またそれに対応する「社会の新陳代謝」も存在していた。さらに「飢饉の冬 (winter of famine)」として語られる927/8年にしても、それは軍事貴族 (dynatoi) の伸長を招来してもいる。逆に、「中世気候異常期」における経済発展や人口増加といった成長の時にこそ、暴力や無秩序といった危機が生じるという議論も引かれ、気候と人間との相互作用が決して単純なシナリオを許さないとして講演が締めくくられることになった。

まさに前近代ユーラシア環境史の最先端と言える内容から学ぶところは多かった。プライザー＝カペラー氏とは現在も定期的に連絡を取り合っており、今後のさらなる連携を模索しているところである。

【謝辞】 本大会に参加にあたっては、JSPS科研費基盤研究(B)「14世紀の危機」についての文理協働研究」(課題番号: 21H00555) の助成を受けた。



プライザー＝カペラー氏講演案内

学界短信

◆ 学会カレンダー ◆

2021年	11月18-21日、 12月2-3日	53rd Annual ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於ニューオーリンズ (11月) およびオンライン (12月) https://www.aseees.org/convention
	12月8-10日	スラブ・ユーラシア研究センター 2021年度冬期国際ワークショップ
2022年	3月30日-4月 2日	The ABS (The Association for Borderlands Studies) 2022 Annual Conference 於デンヴァー https://absborderlands.org/meetings/annual-meetings/
	4月8-10日	BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Conference 2022 於ケンブリッジ大学 https://www.baseesconference.org
	5月4-7日	25th Annual World Convention of the Association for the Study of Nationalities (ASN) オンライン開催 (可能であればコロンビア大学での対面併用) https://nationalities.org/convention/2022-convention

現時点で対面開催の予定となっている学会も、オンラインに変更される可能性があります。各学会のウェブサイトでご確認ください。

大学院だより

◆ オンラインでの入試の実施 ◆

コロナ禍により授業でオンライン会議システムが広く活用されているのは周知の通りですが、北大大学院文学院は今年2月の2021年度後期入試から、修士課程および博士後期課程の入試にもオンライン方式を導入しました。当初は書類審査と面接のみでの試験が想定されていましたが、スラブ・ユーラシア学研究室では外国語の能力を見ることが不可欠であることから、外国語筆記試験も行うこととし、オンラインでの筆記試験の方法を調査・研究し、綿密な予行演習を行ったうえで、無事に実施することができました。

9月の2022年度前期試験も、緊急事態宣言が継続していたこともあり、引き続いてオンラインでの実施となりました。2回目ということもあり、多少の不具合はあったものの基本的には順調に試験を行うことができました。オンライン入試や、対面とオンラインの併用による入試は今後も実施される可能性が高いことから、より効率的かつ円滑に実施できる方法を、引き続き検討していく必要があります。[仙石/宇山]

◆ 長島徹さんがロシア・東欧学会研究奨励賞を受賞 ◆

スラブ・ユーラシア学研究室博士後期課程の長島徹さんが、2021年度ロシア・東欧学会研究奨励賞を受賞し、10月16日の同学会総会(オンライン開催)で表彰されました。受賞作品は、『ロシア・東欧研究』第49号に掲載された論文「ソ連国籍はロシアに継承されるのか：90年代後半のロシアにおける国籍をめぐる議論と、その影響」です。おめでとうございます。

研究奨励賞審査委員会の講評では、ロシア国籍法に関する議論を国家の継承性という新たな観点から検討したこと、国家院の議事録を丹念に分析して審議プロセスを明らかにしたこと、ロシア国外に居住する者のソ連国籍もロシアに承継されるべきだという考え方は2002年国籍法で退けられたものの、条文に一定の痕跡を残し、その後の国籍政策に影響を与えたことを解明した点に論文の価値があると述べられ、独創性と発展性がある研究だと評価されています。なお、この論文は以下のリンク先で読むことができます。

<https://doi.org/10.5823/jarecs.2020.106> [宇山]

◆ スラブ・ユーラシア研究サマースクールの開催 ◆

センターは、8月19日～20日にロシア・東欧学会との共催でスラブ・ユーラシア研究サマースクールを開催しました。本サマースクールは、故中村泰三氏（1933-2016）からのロシア・東欧学会への遺贈寄附と百瀬宏氏からのセンターへの寄附を利用して開かれました。本サマースクールは、スラブ・ユーラシア地域の研究を志す学生を増やし、学生による同地域の学際的な研究を支援・奨励することを目的として企画されました。

参加学生は、全国の大学から公募で選ばれた28名で、内訳は学部3～4年生が15名、修士課程院生が8名、博士課程院生が5名でした。本サマースクールは、対面とオンラインのハイブリッドで実施されましたが、直前に全国でのコロナウイルス感染状況が悪化したことから、対面の参加者は14名、オンラインの参加者が14名となりました。なお、対面参加を断念せざるを得なかった学生のため



望月哲男名誉教授による講義

の代替セミナーを、12月4日にセンターで開催することになっています。

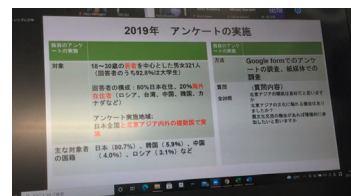


密を避けるための隣室での中継

サマースクールでは、センターの教員や客員研究員など計8人の研究者から、スラブ・ユーラシア地域に関わる文学、言語学、歴史学、社会学、文化人類学、政治学、国際関係論、経済学の観点からの講義がなされました。また、学生同士の交流やセンターの教員などとの交流を目的として、オンライン参加者を含む学生1人1人が研究発表を行いました。講義や発表では、

学生から多くの質問が出され、活発な意見交換が行われました。一部の院生は、滞在を延長して北大附属図書館やセンターの図書室で資料収集を行いました。

実施後に行った参加学生へのアンケートからは、様々な分野の講義を聴いて勉強になった、自分の研究分野に近い教員からのコメントが大変有益だった、同世代の学生の発表に刺激を受けたなどという回答が返ってきました。このようなサマースクールは、初めての試みでしたが、来年以降もより広い範囲のスラブ・ユーラシア研究者コミュニティの支援を受けて継続できないか検討する予定です。[田畑]



オンライン参加学生による発表

大学院修了者の声

言葉を背にして

生熊源一（日本学術振興会特別研究員PD / 早稲田大学）

2021年3月25日付で博士号（学術）を取得した生熊です。私がスラ研の修士課程に進学したのは2013年のことでしたので、数えてみると8年間近く在学したことになります。改めてお世話になったすべての先生方、事務の方々、そして大学院生のみなさまにお礼を申し上げます。

さて、私の大学院生活の記憶を遡っていくと、修士課程の大学院生向けにスラ研が開講している「スラブ・ユーラシア研究の基礎と方法」という科目に行き当たります。これは3名ほどのスラ研の先生が担当する講義で、私が受講した年の担当教員のひとりが望月哲男先生でした。授業後、なにか質問がある人はいますかと聞かれ、「どうやったらいい研究者になれるか？」と質問したところ、望月先生は「仲間というか、他の研究者の論文をよく読むことかな」とお答えになりました（多少違う表現だったかもしれませんが、概ねこのような趣旨だったと思います）。当時はあまり腑に落ちなかったのですが、記憶に残り、折に触れて思い出す言葉になりました。多少なりとも研究の世界に触れてきた今になって、やっと望月先生が言わんとしていたことがわかったような気がします。しっかり実践しているとはなかなか断言しがたいですが、これからもこの言葉を心に留めておこうと思っています。

もちろんそれ以外にも、多くの先生方や先輩方との交流によって、私の大学院生活は支えられていました。長らく指導教官として面倒を見ていただいた越野先生、専門分野の違いにもかかわらず研究生生活を見守ってくださった副指導教官の野町先生、第二の指導教官として多大なるアドバイスをくださった安達先生、そしてかつての研究室で先輩としてお手本であり続けてくれた松下さんがいなければ、私の博士論文が完成することはなかったように思えます。人文学は言葉と切り離せない学問ですが、スラ研は研究のため、そしてそれ以外にも生きるような言葉に満ちた空間でした。

以下、これから進学を考えている方向けに、スラ研の研究環境について記しておきたいと思います。まず、他の修了者の方も書かれていますが、スラ研は大学院生のための各種助成が



集団行為のアクション《5つのスローガン》(2017)にて

充実しており、学会報告助成、海外調査助成、国内調査助成が存在します。私も修士課程の頃に海外調査助成でモスクワなどを訪れたことがあります。早い段階で現地調査を行うことができたのは、その後の研究のための足掛かりになりました。

アウトプットの場合が豊富にあることも、スラ研で学ぶメリットのひとつだと思います。スラ研は国内外を問わず多くの研究者と共同して研究会やシンポジウムなどを頻繁に開催

しており、大学院生に発表の機会が回ってくることもあります。私の場合、ベルギーや韓国の大学との合同シンポジウムに参加させていただいたことがあり、貴重な経験を積むことができました。アウトプットの観点からすれば、半期に一度は皆の前で研究報告をすることになる総合演習の授業も重要な役割を果たしています。総合演習で発表や質疑応答に慣れることで、後の学会発表でも緊張することなく報告をこなすことができるようになります。

中村・鈴木基金奨励研究員制度についても触れておきます。この制度は国内の他大学の大学院生がスラ研に1～3週間滞在し、調査及び研究を進めるための制度です。他大学の大学院生向けですので、スラ研の大学院生とは無関係に思えるかもしれませんが、そうでもありません。この制度のおかげで札幌にいながらにして得た、年齢や専門分野の近い友人や先輩たちとの知己は、スラ研に進学していなければ得られなかった貴重な財産です。

スラ研で学んだことを活かしつつ、これからも研究活動に邁進し、次の世代への橋渡しをしていきたいと思っています。

編集室だより

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

事情により42号の編集作業が遅れています。掲載確定の方には大変ご迷惑をおかけいたしております。43号には論文6本、研究ノート1本、書評5本の投稿があり、現在査読作業が進められています。投稿論文はどれも水準が高く、多くが掲載の予感ですが、その結果やいかに。なお、体調を崩しても編集長を交代ができないなど血も涙もない状況で、私には正直苦痛でしかない役割でしたが、次号には新編集長にバトンを渡せることになりました。既にやる気で満ち溢れておられるので、ASIにとって素晴らしい変化になると思います。[野町]

◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第68号は、昨年8月末時点で記録的に少ない投稿数でしたので、締め切りを11月末まで延長しました。それに伴い編集作業も大幅に遅れましたが、今年9月初めに、以下の力作を掲載して発行できました。

【論文】

清沢紫織「現代ベラルーシ語の標準語規範の分裂と対立」

醍醐龍馬「長崎稲佐ロシア海軍基地をめぐる明治初期日露関係：借地交渉とその意義」

松里公孝「シリア戦争とロシアの世界政策」

【研究ノート】

森下嘉之「第二次世界大戦後のドイツ系「民俗学／歴史学者」：ヴァルター・クーンの研究経歴をめぐり一考察」

本田晃子「カタストロフィの空間：ポスト・ソ連映画の地下鉄表象」

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。なお、第69号への投稿は8月末で締め切られ、11本の原稿が集まりました。現在、査読が進んでいます。[長縄]

会 議

◆ センター協議員会 ◆

2021年度第3回 7月14日(水)【オンライン開催】

議題

1. 令和2年度支出予算決算(案)について
2. 令和3年度支出予算配当(案)について
3. 第4期における方向性と教員の人事について

2021年度第4回 7月28日(水)【オンライン開催】

議題

1. 教員の人事について

2021年度第5回 7月28日(水)～8月2日(月)【メール開催】

議題

1. 教員の人事について(投票)

2021年度第6回 9月7日(火)～9月10日(金)【メール開催】

議題

1. 研究生の受け入れについて

みせらねあ

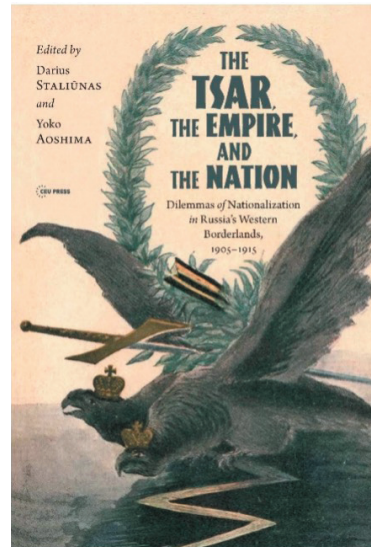
◆ Darius Staliunas, Yoko Aoshima, eds., *The Tsar, The Empire, and The Nation: Dilemmas of Nationalization in Russia's Western Borderlands, 1905–1915* の出版 ◆

ツァーリが支配するロシア帝国は近代ナショナリズムの挑戦にどう対応したのか。本論集はこの問題を、近代ナショナリズムが最初に現れた帝国の西部境界地域(バルト地域、ポーランド、ベラルーシ、ウクライナ)に焦点を当てつつ、多角的に描いたものです。2018年2月10-11日に東京大学本郷キャンパスでリトアニア歴史学研究所との共催で、神戸大学国際文化学術研究推進センターの協力のもと、国



2018年の東京でのシンポジウムの様子

際シンポジウム“Protecting the Empire: Imperial Government and Russian Nationalist Alliance in the Western Borderlands during the Late Imperial Period”が開かれ、そこには8カ国から15名の登壇者が参加しました。その後、このシンポジウムでの報告と議論をもとに、本論文集が作成され、CEU出版から出版されました。編集はシンポジウムを共同で組織したリトアニアの歴史家であるダリウス・スタリューナスと筆者が担当しました。論集には、12本の論文が掲載されており、第一次世界大戦前夜のバルト地域（現エストニア、ラトヴィア）、南北西部諸県（現リトアニア、ベラルーシ、ウクライナ）、ポーランドにおける「帝国のジレンマ」（ユダヤ人に関連する諸問題も含む）に多様な観点から迫ります。本論集は Knowledge Unlatched (KU) によってそのコンテンツとして選定され、KUのウェブサイトから無料でダウンロードが可能です。是非、アクセスしてみてください。



<https://openresearchlibrary.org/content/46c7b1f4-549b-4010-a126-1d2ded7d0211> [青島]

◆ 専任研究員消息 ◆

ウルフ・ディビット研究員は、6月25日～9月28日の間、資料収集のためアメリカに出張。
長縄宣博研究員は、6月10日～7月14日の間、資料収集のため、アメリカに出張。

目 次

研究の最前線	1
2021年度冬期国際ワークショップ《権威主義的統治の制度と戦略》開催予告／ 2021年度夏期国際シンポジウム《不確実性の時代のスラブ・ユーラシア研究：対 話と再検討》開催される／2021年度公開講座の開講／境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) 10周年記念展示／NIHU・UBRJ実社会共創セミナー開催／連携 セミナー「北方史と南方史の邂逅」の開催／ArCS IIの最初の研究成果の発表／ ArCS II社会文化課題第2班研究会の開催／2020・2021年度外国人招へい教員(外 国人研究員)の現況／外国人招へい教員(外国人研究員)制度(FVFP)採用決定 方法の変更／2021年度中村・鈴川基金奨励研究員の決定と滞在／第1回百瀬フェ ローの決定／専任研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き	10
京都大学・東京外国語大学とクロスアポイントメントを実施	
Predrag Piper 教授(1950-2021)のご逝去を悼む	12
by 野町素己	
プリンストン高等研究所の(リモート)研究員となって	17
by 長縄宣博	
MC 2021 参加記 —プライザー＝カペラー氏の基調講演を中心に—	23
by 諫早庸一	
学界短信	26
学会カレンダー	
大学院だより	26
オンラインでの入試の実施／長島徹さんがロシア・東欧学会研究奨励賞を受賞／スラブ・ ユーラシア研究サマースクールの開催	
大学修了者の声	28
言葉を背にして by 生熊源一	
編集室だより	29
<i>Acta Slavica Iaponica</i> / 『スラヴ研究』	
会議	30
センター協議員会	
みせらねあ	30
Darius Staliunas, Yoko Aoshima, eds., <i>The Tsar, The Empire, and The Nation: Dilemmas of Nationalization in Russia's Western Borderlands, 1905-1915</i> の出版／専任研究員消息	

2021年11月30日発行

編集	宇山智彦
編集協力	井上岳彦
DTP 編集	ささやめぐみ
発行者	岩下明裕
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
